

# 「私でも伝わるんだ」

宮城・南三陸町

街角

## ことば拾い

103

この朝も、宿泊客を乗せたツアーバスは東日本大震災で被災した小中学校があった地区を回り、かつての結婚式場「高野会館」に近づく。津波の被害に遭った当時のまま、宮城県南三陸町の「南三陸ホテル観洋」が管理する民間震災遺構だ。

「あの日、高齢者の芸能大会が開かれていました。屋上や4階に避難して327人全員が無事でした」ガイド役の語り部を

務めるホテル従業員の男性が指さす。会館の先には、津波で町職員ら43人が犠牲になった町旧防災対策庁舎の赤い鉄骨が見える。

ツアーの語り部の一人、斉藤修さん(65)は震災当時、新潟で別の仕事をしていた津波は経験していない。縁あって14年前に入社し、語り部にならないかと打診された。「お客さんは経験者本人の話を聞きたいはずなので」と、いったんは辞退し

たが、おかしな「被災した人たちだけでは語り継がない」と言われ、「第二の語り部」として引き受けた。

先輩のバスに乗り、案内を録音して書き起こし、勉強した。震災の経験者からも話を聞いた。それでも「自分がやっていいのかわからない」という迷いは消えなかった。ある日のツアーだった。子どもたちが懸命に避難した様子を語っていた時のこと。乗客の一人が涙を流しながら聞いていた。

「私でも伝わるんだ、と思えたんです」

高野会館は2022年、何者かにガラスや壁を壊される被害に遭った。それを知った仙台のガラス業者がボラ

## 第二の語り部として



語り部バスは震災遺構「高野会館」を巡る

ンティアで修理してくれた。斉藤さんはホテルのフロクに、高野会館の無言の思いを代

弁するかのように心ない行為への怒りと業者への感謝をつづり、最後に「物言わぬ語り部 高野会館」と記した。

る。被爆者から体験を聞き取り、講話をする広島市の「被爆体験伝承者」への取材を思い出した。戦後生まれのある女性には自分にできるのかと悩んだが、被災当時、少年だった男

性がさまよいながら渡った川を越え、歩いた道をたどって、少年の見たであろう光景を想像し、心に刻んだという。

震災から15年。南三陸ホテル観洋にもあの日を知らない新人が入社してくる。彼らは研修期間に語り部バスに乗り、斉藤さんたちの話を聞く。これもまた「伝承」の形だ。

バスはツアーを終え、ホテルに戻った。斉藤さんが「ロビーからの眺めは、震災があったとは思われないほど美しい」という、青く穏やかな志津川湾が目の前に迫った。

【花谷寿人】  
(毎月第2、第4土曜日に掲載します)



特設サイトはこちら